

としよかん
だより

第112号

発行
茨城県立潮来高等学校
図書委員会

おめでとう!
読書感想文
茨城県コンクール入選

今年度は感想文が一点入選しました。入選者は次の通りです。感想文は4〜5ページに掲載しました。

第六十七回青少年読書感想文
全国コンクール茨城県高等学校の部
入選 二年B組 山野 璃音

委員会の活動

県東地区生徒図書委員研修会

加藤 颯太

令和七年六月五日に行われた、「県東地区生徒図書委員研修会」に本校代表として三年生二名と一年生二名

が参加しました。今年は鹿島学園高等学校での開催でした。

県東地区の各学校の代表者が集まり、『私たちの世代は』、『成瀬は天下を取りに行く』、『ハリネズミは月を見上げる』の課題図書を事前に読み、3チームに分かれてそれぞれの図書に関するディスカッションを行いました。今回の研修会について、大変印象に残ったのは、担当校である鹿島学園の生徒さんによる見事な進行です。その場を包み込むような細やかな配慮と、的確なリードのおかげで、会場は終始和やかな雰囲気。初対面の生徒同士でも緊張がほぐれ、あちこちのグループから活発な意見が飛び交っていました。

今回の課題図書の中には、コロナ禍を生きる世代を題材にした作品がありました。ディスカッションのテーマは、図らずも自分たちの実体験

へと繋がっていきます。生徒たちは、作品の登場人物に自分たちを重ね合わせながら、当時の葛藤や今の想いを素直な言葉で発表し、共感しあっており、その姿が私の記憶に強く残っています。



本校から参加した生徒たちも、立派にその輪に加わっていました。自分の考えを堂々と周囲に伝える姿は

もちろん、中には言葉に詰まりながらも、一生懸命に自分の内側にある答えを探し、最後まで伝えようと努力している生徒の姿もありました。校内での日常的な活動ではなかなか味わえない、他校の仲間との真剣なやり取り。それは生徒たちにとって、自分の世界を広げる特別な時間になったと思っています。本を通じて他者の視点を知ることにも繋がります。今回の研修で得た「言葉にする力」を、ぜひこれからの学校生活にも活かしてほしいと願っています。



ブックエント

先生方に「おすすめの本」の紹介をしていただきました。

「天国へのマーチ」

西谷 尚雄 著



校長
高野 光章

高校時代の私は、「吹奏楽」をこよなく(異常に?)愛する高校生でした。そのとき、吹奏楽部の部室で目にした「バンドジャーナル」(吹奏楽専門誌)に掲載されていた「全日本吹奏楽コンクール歴史的名演」で取り上げられていたのは、「西宮市立今津中学校(兵庫県)」と「豊島区立豊島第十中学校(東京都)」でした。雑誌に掲載されていた記事を読んだ後、全国大会の歴史的名演というのは、どのような演奏なのだろうと授業にも集中できなくなる程の期待感がありました。そして、ついに手

に入れた両校の演奏が収録されたコンクール実況録音のレコードで聴いたとき、中学生としての技術力の高さや完成度にも驚きましたが、音楽的表現力の高さやサウンドの幅広さに大きな感動を覚えました。併せて、両校の面白い特徴に気付きました。それは、画一的になりやすい音の響きが、それぞれの学校で個性があることでした。また、今津中学校、豊島第十中学校のそれぞれの先生の音楽へのアプローチは、方法は違えど、生徒の個性を十分に生かした音楽の構築や語法に感銘し、いつか自分でも、そのように音楽を伝えたい・表現したいと思った原点だったと振り返っています。

さて、表題の『「天国へのマーチ」西谷尚雄 著』は、西宮市立今津中学校吹奏楽部を指導し、吹奏楽の一代目を築き、吹奏楽に一生を捧げた伝説的教育者「得津武史先生」の生涯を取り上げたものです。伝説の清々しいサウンドと音楽づくりは、先生自身の生き方や在り方であったのではないかと。ゆえに誰も真似できないものだったのではないかと。得津先生と個性豊かな生徒たちが創り

出した素晴らしい演奏は、レコードに伝説として残されています。



「科学的に証明された

すごい習慣大百科」

堀田 秀吾 著



教頭
金子 宏子

高校生の皆さんへおすすめしたい本が、現在ベストセラーになっている「すごい習慣大百科」です。毎日「もっと効率よく勉強したい」「自分を変えたい」と思いながら、ついスマホを眺めて一日が終わっていませんか?そんな「変えたいけれど、どうすればいいかわからない」というモヤモヤを抱える皆さんに、ぜひ読んでほしいです。

この本の魅力は、根性論や精神論が一切ないことです。「やる気が出ないのは気合が足りないから」なんて突き放すことは言いません。脳科学や心理学のエビデンスに基づき、「どうすれば脳が自然に動くか」という具体的な仕組みを教えてください。この本によると、人間は「体が先、メンタル(思考)が後」であるため、「まず動く」ことによってやる気が生まれてくるということです。体から「元気に動いている」という信号が脳に送られてくると、脳は「自分はいま、元気なんだ」と判断し、だったら一層そうなるようにと、神経伝達物質(ドーパミンやアドレナリンなど)を送ろうとするのです。「本を読む時間がない」という人も安心してください。この本は図解や要点が整理された「大百科」形式なので、どこから読んでも大丈夫です。テスト前なら集中力の項目、部活で悩んでいるならメンタルの項目など、今の自分に必要なページだけをサクッと「つまみ食い」するだけで、すぐに実践できるテクニクが見つかります。

高校時代の習慣は、その後の人生を左右する大きな財産になります。「意志の強さ」に頼るのではなく、「仕組み」を使って自分を操るコツを学ぶ。それだけで、毎日の景色は驚くほど変わります。この一冊で、昨日までの自分を科学的にアップデートしてみませんか？



「やりたいこと」の見つけ方

八木 仁平 著



川平 穂乃花

「将来、何がやりたいのか分からない」という悩みは、高校生にとっても自然なものです。今年、三学年の担任となりました。生徒との面談を行い、「やりたいことがありません」という言葉が想像以上に多

く、私も生徒と同じように不安な気持ちになっていました。そんな中、八木二平さんの著書『「やりたいこと」の見つけ方』を読み、人生の岐路に立つ皆さんにぜひ読んでほしいと感じ、この本を選びました。

この本では、「やりたい事は、特別な才能や強い情熱がある人だけのものではない」と、はっきりと伝えてくれます。多くの人は、「好きなことが見つからないのは良くない」と思い込んでしましますが、やりたい事は突然ひらめくものではなく、日常の小さな経験や行動の積み重ねから形作られていくのだと語ります。

また、「向いているかどうか」を考える前に、「少しでも気になることを試してみる」姿勢の大切さが強調されています。私も常々、失敗をしたくないとか、そういうことを考えますが、一瞬、前向きに行動できなくなりましたが、試してみたらいい経験になったと思うことが大半だったと感じます。大袈裟かもしれませんが、私自身もそういった小さな経験から人生の選択をしてきた気がします。進路は一度決めたら変えられないものではありません。行動し、考え、

修正していく中で、自分なりの答えが見えてくるとこの本にも書かれています。

将来を決めるための正解を与えるのではなく、自分自身と向き合うためのヒントを与えてくれます。進路に悩んでいる人も、そうでない人も、自分の可能性を狭めずに歩んでいくための一冊として、ぜひ手に取ってみてください。



「アンクル・トムの小屋」

ハリエット・ピーチャー・ストウ 著

大西 拓人



「あなたが、この大きな戦争を引き起こした本を書いた小さなご婦人なのです」と、小説の筆者ストウ

は、出版から約十年後、第十六代アメリカ合衆国大統領リンカンに声をかけられたといわれています。本小説は、アメリカ南北戦争を引き起こしたと言われるほど大きな影響力を持った小説でした。

十七、十八世紀において、アフリカからの最大の輸出品は「人間」でした。当時イギリスの植民地であったアメリカの開拓のため多くの黒人奴隷が運ばれ、戦争を経て独立した「アメリカ国民」が市民権を得た時も、そこに黒人は含まれず、奴隷制が継続されました。

こうした状況を批判し、社会の意識を変えるきっかけとなったのがこの小説です。本小説は、「隣人を愛せ」と謳うキリスト教が深く根付いたアメリカ社会において、「人を人扱いしない制度が許されるのか」と矛盾を突き付けるものでした。結果的にアメリカ世論を奴隷反対の北部に傾けさせることになり、北部の勝利によって南北戦争後に奴隷制は制度上は消え去ることになりました。また個人的に印象に残る部分があります。「これが自分の国ですか？わたしのようにならぬ親から生まれた



人間にとって？誰のための法なんです？私たちが定めた法ではない。私たちが同意した法ではない。政府の正当な権力は治められる側の同意に由来するものだ、と。」これは黒人奴隷ジョージの言葉です。「法とは」「国とは」「政府とは」「権利とは」どのようにあるべきか。目に見えないながらもわたしたちを囲む社会の仕組みが、これほどまでに感じられる言葉を今まで私は目にしたことありません。当時のアメリカ国民だけではなく、現代の私を含めさまざまな人の心を動かし、社会をも動かす力を持った言葉がこの小説に詰まっています。

「独断と偏見」

二宮 和也 著



加茂 春花

「みんながそう言っているから」という理由で、自分の考えを決めてしまうことはありませんか。高校生活では、友達関係や進路、SNSでの評価など、周囲の声に影響される場面が少なくありません。そんなときに読んでほしいのが、二宮和也さんの『独断と偏見』です。

この本は、アイドルとして長年第一線で活躍してきた二宮さんが、仕事観や人間関係、日常の出来事について率直に語ったエッセイ集です。十の四字熟語を軸に事務所から独立したときの話や感情のコントロールの仕方、チームの結束力を保つ秘訣などなど百個の問いに答えています。タイトルの通り、あくまで「自分の意見」として物事を見つめ、その考えをまっすぐに言葉にしています。感情に流されるのではなく、「自分はどう思うのか」を丁寧に考え抜く姿勢が印象的です。

特に心に残るのは、周囲に合わせる

ことよりも、自分の頭で考えることを大切にしている点です。人気者でありながら必要以上に自分を大きく見せようとせず、「普通」であろうとする姿からは、本当の強さが伝わってきます。それは、これから進路を選び、自分の将来を考えていくみなさんにとって大きなヒントになるはずです。

誰かの正解に安心するのではなく、自分なりの答えを持つこと。その大切さを静かに教えてくれる一冊だと思います。長年推してきた私からすると、推しの新しい一面・これまで見えなかった一面を見ることができて幸せな限りですが、そうでない人も、仕事との向き合い方や人とかかわり方など自分自身の考え方を見つめるきっかけの本にもなると思います。迷ったときこそ、手に取ってほしい一冊です。



人間という存在の奥深さ

山野 璃音

私は、「アルジャーノンに花束を」を読んで、主人公チャーリー・ゴードンの「知能の上昇」と「再び失われていく過程」を体験するなかで、人間にとって本当に大切なものは何かを深く考えさせられました。知能や能力よりも、他者との関わり、そして思いやりの心が人間を人間らしくするのではないか、という思いが強く胸に残りました。

この本は、知的障害を持つ青年チャーリーが、知能を飛躍的に高める手術を受けるところから始まり、経過は「経過報告」という日記形式で綴られています。最初はほとんどが平仮名で誤字や単純な文ばかりだが、手術後は難しい専門用語を駆使するほど高度な文章へと変化していきます。その文章の変化が彼の成長と衰退を映していた点に、文で変化や感情を表す奥深さを感じました。特に印象に残ったのは、知能が高まったことでチャーリーの視界が一

気に広がる場面です。手術前、彼は仕事場のパン屋で同僚にからかわれ、笑いにさらされていたことに気づかなかつたが、知能が上がった後、かつての笑いが優しさではなく「嘲り」であったと理解し、深い孤独に沈んでしまいます。私はその場面を読んで、知識や理解力が必ずしも幸福をもたらすわけではないと痛感しました。むしろ知らなくて良かった

真実に気づくことは時に人を傷ついたり、欲しかった高い知能が彼をより孤独にした逆説に、私は強い印象を受けました。

また、知能を得たチャーリーは、人々と対等に語り合うどころか、距離を置かれてしまいます。彼が理解できる高度な議論に周囲の人々はついていきません。ここに「知識」と「人間関係」の難しさが表れている、人より優れていることが必ずしも人と生きることに繋がらないのです。この矛盾を抱えつつ、彼は「人と分かり合うこと」の価値を求めたのだと思います。私はこの部分を読んで、勉強や能力を競い合う学校生活や成績に目を向け、人とのつながり

や思いやりを忘れていないかと振り返りました。

さらにアルジャーノンという白いマウスの存在は、物語に意味を与えていると思います。

同じ手術を受け、最初は知能を高めたアルジャーノンが、やがて衰え死んでいく姿は、チャーリーがアルジャーノンに深い愛情を抱き、最後に「アルジャーノンに花束を」と願った場面はとても感動しました。それは単なる小さな動物への弔いではなく、命あるものへの敬意であり、自らの運命を受け入れる姿の現れだと思いました。

ここで私は、「人間らしさ」とは何か考えました。人間の価値は知能や学力で決まるのでしょうか。もちろん知識は人生を豊かにする手段になるが、チャーリーが最後に示したのは知識よりも「思いやり」や「優しさ」を大切にすることでした。知識を失っていくなかで、彼はアルジャーノンを愛し、人に理解してほしいと願いました。その姿に私は、人間の本質的な美しさを見たように思いました。私は、日常生活で無意識のうちに人を「この人はできそう」「この人

はできなさそう」と判断している自分に気づかされました。部活動で先輩を指導するときも、勉強で友人と比較するときも、私は相手を「能力」で見えてしまうことがあります。

しかし、この小説はその考えを揺さぶりました。人を評価する基準は点数や結果ではなく、その人の努力や思いやりを目を向けていること、チャーリーの物語を通して、その当たり前のことを改めて実感させられました。

「アルジャーノンに花束を」は、悲しい結末でありながらも、読者に温かな希望を残す物語だと感じました。チャーリーは知能を失ったけど、人間として大切な「心」は最後まで失いませんでした。その姿は、私たちが生きていく上で、大切にしていなければならないように思えました。

これからの人生で私は、多くの知識を身につけ、社会にでていくことになるでしょう。そのとき、知識をひけらかすのではなく、人と絆を深めるために使いたい。そして、どれだけ能力が変わろうとも、人に優しさを向けられる自分でありたい。チ

チャーリーが願った「理解されたい」という思いを、私は現実の社会で実現できるように努力したいのです。本を閉じた今、私にできることはアルジャーノンの小さな墓に花を供えるチャーリーの心を受け継ぐことだと思えます。人を思いやる気持ちを忘れずに生きていくこと、それがこの物語からの最大の贈り物であると強く感じました。



読んだ本

書名 『アルジャーノンに花束を』
著者 ダニエル・キイス

